



AUE Monthly



2010年 9月 1日

第 26 号

編集・発行

愛知教育大学広報部会

TEL 0566-26-2738

FAX 0566-26-2500

目次

- 行事予定(9月)
- トピックス
 - ・小中英語支援室創設記念講演会
 - ・横地理事が教育長に要請
 - ・オープンキャンパス
 - ・学長が碧南, 高浜市へ支援のお礼
 - ・社会科教育ワークショップ発表会
 - ・米留学の林真智子さんが学長に挨拶
 - ・経営協議会・顧問合同会議
 - ・管弦楽団定期演奏会
 - ・NIEセミナーを開催
 - ・高校生サイエンスサマーキャンプ
 - ・鷹巣准教授がラジオ出演 & 能楽堂で講演
- ・大学スケッチ展に村瀬さん兄隆志さん来場
- ・中日新聞が学長にインタビュー
- ・インターンシップ開講式
- ・教員免許状更新講習
- ・附属学校研究協議会
- ・教員就職相談員懇談会
- ・公開講座
- ・陶芸研究室学生らの作品展
- ・愛知県議会での要望活動
- ・中国留学の高橋利幸さんあいさつ
- ・タイ協定校の研修生が来学
- お知らせ・報告・投稿
- ・目からウロコのアート展
- ・井戸准教授からのフィンランド便り

行事予定(9月)

- 1日(水) 学生支援委員会(13:30~ 第五会議室)
- 3日(金) 大学改革推進委員会(13:00~ 第三会議室)
- 6日(月) 教務企画委員会(16:40~ 第三会議室)
- 7日(火) 役員会(13:00~ 学長室)
教員人事委員会(16:40~ 第五会議室)
- 8日(水) 教育創造開発機構委員会(9:00~ 第三会議室)
代議員会(13:30~ 第五会議室)
教育研究評議会(代議員会終了後~ 第五会議室)
- 9日(木) 教員人事委員会(9:30~ 第五会議室)
- 10日(金) 附属学校運営委員会(10:00~ 第三会議室)
- 14日(火) 役員部局長会議(13:00~ 学長室)
安全衛生委員会(16:40~ 第五会議室)
- 15日(水) 財務委員会(15:30~ 第五会議室)
- 21日(火) 役員会(13:00~ 学長室)
- 22日(水) 教授会(13:30~ 第一会議室)

トピックス

小中英語支援室創設記念講演会(8/1)

本学小中英語支援室の創設記念講演会が8月1日(日)午前10時から,名古屋市中区の名古屋栄ガスビル5階で行われた。

同支援室は2011年度からの学習指導要領導入で大きく変わる小・中・高校での英語教育をサ

ポートしようとして設立されたもの。この日は、優れた英語教育の専門家らが授業展開について講演した。

来年度からは小学校での外国語教育が必修化、中学校では授業時間の増加、高等学校では英語による授業展開が始まるなど英語教育をとりまく環境が変化する。冒頭、松田正久学長が「英語教育の取り組みが拡充する中で、サポート体制を学校の先生方、一般の方々と協力しながら進めていきたい」とあいさつした。会場には小中高等学校の英語教員や英語教員志望学生、英語教育に関心のある一般など 227 人が詰めかけ、熱心に耳を傾けた。



講演会では、「英語教育のカリスマ」として知られる関西大学の田尻悟郎教授が「中学校英語、増える 1 時間に何をやるのか?」と題して、自らの体験を交えて語った。「授業は、理解（考える、気づく） 習熟（暗記をする） 応用の発展（使いこなす）。学ぶというのは練習の中から生まれる。答えが分かったら話したいでしょ、いい授業なら子どもたちが勝手に話し始めます。学問は考える喜び、すべて喜びを伴うものでなければ」と述べた。そして、「1 時間増えるのであれば、本当に理解、習熟、応用されたのか、チェックする。それは学校でしかできないこと」と話し、CanDo List の活用などを紹介。聴衆も問題を解いて練習を繰り返すことで出来ることの楽しさを体感するデモンストレーションに参加、会場は活気に包まれた。

午後からは 2 つのシンポジウムを実施。小学校向けには「中学英語を見据えた小学校外国語活動」として、岡崎市立本宿小学校の白井直美校長、安城市立里町小学校の小川恵子教諭が、中学校向けには「小学校外国語英語を見据えた中学校英語」として、愛知県教育委員会義務教育課の星有子氏、本学附属名古屋中学校の永倉元樹教諭がそれぞれパネリストとして登場し、授業への取り組み方を話し合った。

横地理事が教育長に要請(8/2)

横地正喜理事（連携担当）は 8 月 2 日（月）、内田浩幸田町教育長（町村教育長協議会会長）と花井正文豊川市教育長（都市教育長協議会会長）をそれぞれ幸田町役場、豊川市役所音羽支所に訪ね、2011 年度予算概算要求に向けて運営費交付金を削減しないよう理解を求めるとともに本学への支援アピールを要請した。富岡逸郎事務局長らが同行した。



内田教育長との懇談では、横地理事が「非常に厳しい現状を説明させていただき、ご協力をお願いしたい」とあいさつ。富岡事務局長がシーリングの本学への影響、松田正久学長の緊急声明などを説明すると、内田教育長は「わかりました。附属の先生が町村に来て指導してもらえるのは大変ありがたい。

（愛教大の運営困難な事態は）愛知の教育の根幹に関わること、会合で愛教大の実状を説明し、アピールについては花井さんと検討してみます」と答え、理解を示した。

花井教育長も横地理事らの説明に理解を示し「教員の需要はこれから増えていく。賛同は得られるだろう。町村、都市教育長協議会でアピールを出す方向で検討したい」と積極的な支援を約束。その後の 8 月 17 日（火）に両教育長協議会は本学支援アピールを公表した。



オープンキャンパス(8/3,4)

高校生やその保護者に向けた学校見学会「オープンキャンパス」が 8 月 3 日（火）、4 日（水）に行われた。3 日には 2189 人、4 日には 1775 人、2 日間で計 3964 人が来学（昨年は 2 日間で 3263 人）、約 20 年前にオープンキャンパスが始まって以来、最多の見学者数となった。



午前 10 時から講堂で松田正久学長が開会の挨拶。「今日は愛知教育大学の中身を、自分の目と耳と体でしっかり見てください。ぜひ来年、再来年の 4 月には皆さんに入学の祝辞を言わせもらいたい。充実した 1 日を過ごしてください」と語り掛けてオープンキャンパスがスタート。続いて、ステージで合唱やアカペラのクラブ・サークルによるパフォーマンスが披露された。

講堂ロビーにはカリキュラムや学校生活、就職・入試関係の質問コーナーが設けられ、多くの来場者が熱心に質問する姿が見られた。また、施設の自由見学も行われ、図書館や国際交流センターなど 8 カ所で施設の公開や説明会も開かれた。

今年は、例年各日 1 回だった課程・選修・専攻・コース別説明会を、両日とも 3 回に増やして実施、そのため希望者は複数の説明会への参加が可能になるなど、来場者の利便性を重視。また、在学生の参加も前年に比べて増加。キャンパス内の道案内をしたり、相談コーナーで質問に答えたり、説明会で体



験授業のアシスタントを務めるなど活躍。大学の魅力を来場者に伝える案内役として奮闘した。

4 日には、NHKの記者がここ数年で様変わりした大学のオープンキャンパスの実態を取材。松田学長や稲垣敏之入試課長へのインタビュー、説明会や体験授業の様子を撮影した。その模様は 8 月 20 日午後 6 時から報道番組「ほっとイブニング」で放送された。



松田学長が碧南市、高浜市へ支援のお礼(8/3)

国立大学運営費交付金削減の動きに対して碧海 5 市長が愛知教育大学支援アピールを表明したことへのお礼のため、松田正久学長が 8 月 3 日(火)午後、碧南市と高浜市の市長らを表敬訪問した。

7 月初めに政府が平成 23 年度概算要求基準で国立大学法人の運営費交付金などの一律 10%削減の方針を示し、本学は 7 月 13 日(火)に松田学長名で運営費交付金削減対象としないことを求める緊急アピールを発表。同 30 日(金)には本学への支援アピールを地元の碧海 5 市長が表明した。



碧南市役所で松田学長は都築明副市長と長田良次教育長と面談。松田学長は法人化以来、本学が置かれた厳しい財政事情を改めて説明し、「地域の支持が国を動かす一番の力になる。愛知県の教育のため愛教大に頑張ってもらわないといかんと支持をしていただいたことに感謝申し上げます」とお礼を述べた。都築副市長、長田教育長からは本学の地域連携について質問があり、松田学長は外国人児童・生徒への支援や訪問科学実験などの取り組みを説明。今後、教育部門での連携を深めることを約束した。



高浜市役所では吉岡初浩市長と面談し、同じく本学支援について謝意を述べた。吉岡市長は「われわれも愛教大の恩恵を受けている。教育は国がやらなければいけない。地域で唯一の国立大学ですから、今後も支持をしていきたい」と理解を示し、松田学長は「われわれにとって、お金の面もさることながら、何より精神的な支援が大切。続いて、国立 4 大学支持のアピールも出していただけると有り難い」と更なる支持を要望した。

社会科教育ワークショップ発表会(8/4)

社会科教育専攻3年生による社会科ワークショップ発表会が8月4日(水)午後1時30分から、第一共通棟303教室で開かれた。

オープンキャンパスの一貫として、学生たちが社会科の模擬授業を公開するもので、学生が企画からプログラム作成、司会進行までを行い、9グループがそれぞれ20分間の発表をした。

テーマは「地域の宣伝部長になろう」「記事をカルタに - 君の言葉で事実を伝える - 」「子ども店長になろう」「発見 探検隊」「町づくりと環境問題」「日本史カードゲーム 歴史王」などさまざま。各グループはあらかじめ指導案を作成して模擬授業に挑んだが、見学の高校生らに質問の意図が伝わらなかったり、映像機器が上手く作動しなかったりで、学生たちは想定外の反応やハプニングに悪戦苦闘。発表を終えると「指導案どおりに上手くいかなかった。こちらの思いだけでなく、どうすれば相手に理解されるか考えなくては」と反省しきりだった。



それでも、下水の仕組みを説明する場面では、解説図で説明するだけでなく実際にペットボトルで汚れた水を浄化する実験で浄化の様子を見せて、分かりやすく紹介するなど授業展開に変化をもたせて見学者の興味をそそる工夫も見られた。

指導教員の土屋武志教授は「こうやって苦い経験を積みながら、授業の仕方を学んでいきます。学生たちには大切な経験」と話し、頭で考えるだけでなく実際に教える経験の重要性を説いていた。

米留学の林真智子さんが学長に挨拶(8/5)



交換留学生として1年間、アメリカ・インディアナ州のボールステイト大学へ留学する林真智子さん(障害児教育4年)が8月5日(木)午後、出発前のあいさつのため学長室に松田正久学長と村松常司学生担当理事を訪ねた。

林さんが「今から楽しみです。不安もありますが、開き直って頑張ってきます」と笑顔で語ると、松田学長は「せっかくの大事な1年間、しっかりやっつけよう。でも事故だけは気をつけて」と激励し、握手を交わした。

林さんは8月14日(土)から来年5月まで、ボールステイト大学へ公費留学。大学で寮生活を送りながら、同大でアメリカの障害児教育を学ぶ。留学中の生活ぶりはAUE Monthly にリポートで寄稿の予定。

経営協議会・顧問合同会議(8/6)

本学の2010年度経営協議会と顧問会議の合同会議が8月6日(金)、名古屋市中村区の名鉄ニューグランドホテルで開催された。意見交換が目的で、両会議合同による会議は初めて。

会議には片桐正博愛知県副知事、金森昭夫中日新聞社取締役管理局長、兼松顯名城大学名誉教授、神野重行名鉄百貨店社長、神野明文法律事務所所長、神谷龍彦名古屋市教育委員会委員長の各経営協議会外部委員と佐藤泰介前参議院議員、白井文吾中日新聞社会長、田原賢一前学長、仲井豊元学長、深谷紘一デンソー会長、松原武久前名古屋市長の各顧問、松田正久学長はじめ本学理事、事務局長ら計24人が出席した。



冒頭、松田学長が「お忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。忌憚のないご意見を聞かせていただきたい」とあいさつ。続いて「新たな60周年に向けて」「将来構想」「第二



期中期目標・中期計画」や「入学試験状況」「卒業生の就職状況」などについて資料に基づいて説明した。

委員、顧問からは「質の高い受験生を増やす工夫をすべき」「世界ランクで日本の大学が下位にいる原因の分析を」「予算削減で教育が荒廃しては困る」「大学の縮小均衡では大変。先生がひもじくなると教育に影響する」「質のいい先生を一人でも多く出し、教室の荒廃を止める指導力ある人を養成してほしい」などの意見が出された。これを受けて学長が背景などを説明し、理解、協力を求め、2時間の会議を終了した。

管弦楽団定期演奏会(8/8)

本学管弦楽団の第73回定期演奏会が、8月8日(日)午後6時30分から、名古屋市東区の愛知県芸術劇場コンサートホールで開かれた。

この日の演奏曲は、L.V.ベートーベン「交響曲第3番 変ホ長調 op.55 “英雄”」、L.ドリーブ「バレエ組曲“シルヴィア”」、J.シベリウス「カレリア序曲」。客演の寺島康朗氏(東京シティオペラ協会首席指揮者)の指揮で迫力あるパフォーマンスを披露し、観客を魅了した。



今回は本学学部学生、OB、OGと他大学の演奏者による70人余で編成。団員の希望で演奏曲を決め、入学式直後の今年4月から約5カ月間、毎週2、3回の合同練習を重ねて、定期演奏会の準備を行ってきた。定期演奏会は年に2回。次回は2011年3月に開催の予定。

教員免許状更新講習(8/9-25)

教員免許状更新講習が本学で8月9日(月)~25日(水)に行われ、35講座が開かれ、延べ2280人が受講した。

教員免許更新の制度が平成20年度から施行され、教職に就いて10年、20年、30年目の教員が免許更新のために科せられたのが同講習。本学では19年度の試行から実施、本格始動して2年目で、期間中、各教科の講座が行われ、県内外の小中高校、特別支援学校の教員が、プログラムの中から希望する講座を受講した。



18日(水)には、その一つ、「教えます“学級通信・学級新聞ノウハウ”」と題した講座が第一共通棟213教室で開講され、40人の定員を上回る50人が受講。この日は中国残留孤児だった祖母について日本に移住し、日本に帰化した柴田佳子さんを迎えて、参加者が記者役になる模擬記者会見に挑んだ。講師の中日新聞NIE事務局委員の服部賢さんから「インタビューの相手の情報をたくさんとる。誰かに伝えるために文章にする。聞きにくいことも、厚

かましく聞く」など心構えを伝授され、「日本の印象は」「日本に来て辛かった思い出は」など日本での生活、今後の夢など柴田さんの心境に迫った。

さらに、19日(木)には「プロから学ぶ“新聞とは”」をテーマに、報道写真の取り方の講座も。中日新聞写真部デスクの柳田大慈さんを講師に、写真の取り方のコツや撮影裏話などが披露され、参加者から「学校で写真を撮ることも多いので、今日の講座はとても役に立ちます」と好評だった。

NIEセミナーを開催(8/10)

教職員を目指す学生などを対象にしたNIEセミナー「教育に生かそう新聞力」が8月10日

(火)、名古屋市中区の中日新聞で開かれ、本学の土屋武志教授(社会科教育)が講演した。

同セミナーは中日新聞社が毎年夏に開く恒例の催しで、今回は「新学習指導要領とNIE」がテーマ。土屋教授は日本NIE学会理事として、中部地方の参加者123人を前に基調を行った。

来年度からスタートする新指導要領の目的を「子どもたちの言動活動、思考力、表現力を高めること」とし、「表現、主張には根拠が必要で、保存ができて出典の明らかな新聞が最適のメディア」と説明した。

この日は他に、浜松市立船越小学校教諭で日本新聞教育文化財団NIEアドバイザーの山崎章成教諭が、小学校1年生から始められる新聞の活用方法や学習の重要性を紹介した。

高校生サイエンスサマーキャンプ(8/10, 11)

高校生を対象にした「2010年度高校生サイエンスサマーキャンプ」が8月10日(火)、11日(水)の2日間、本学自然科学棟などで開催された。

高校生の理科離れが懸念される中で、物理学、化学、生物学、地学、天文学の理科5分野の実験や体験をすることで、自然科学を学ぶ楽しさを実感してほしいと、本学が2006年から実施する夏休み恒例の講座。5年目の今回は、愛知県と岐阜県の高校2、3年生、計24人が1泊2日の同キャンプに参加した。

10日は午前9時からの開講式の後、生物学講座「遺伝子診断」を菅沼教生教授が講義。午後からは岐阜県瑞浪市へバス移動して、地学講座「地層観察から探る大地の変動」を星博幸准教授が、本学での天文学講座「天体望遠鏡の原理と天体観測」を沢武文教授がそれぞれ講義。夜は、本学近くの刈谷市洲原ロッジに宿って、アシスタントを務めた大学生や大学院生と語り合うなどして交流を図った。

11日には、物理学講座「身近な物を物理の眼でみると」を岩山勉教授が、化学講座「技と化学が力を合わせてみんなの感動を」を戸谷義明教授が担当。化学マジックショーのサブタイトルのとおり、生物発光実験ではピーカーの中の物質に別の物質を混ぜ合わせると黄色や緑、オレンジの光を放つケミカルライトができる様子を目の当たりにした高校生たちから、「うわ~!すごい」「きれい!」と歓声が上がった。



閉講式で終了書を受け取った高校生は「高校ではやらない実験ができた。身近にある科学がすべて面白かった」と、大学レベルの“理科実験ざんまい”の2日間に満足そうだった。

鷹巣准教授がラジオ出演 & 能楽堂で講演(8/11, 22)



地獄絵を研究する鷹巣純准教授(美術教育)が8月11日(水)、CBCラジオの番組「ごごイチ」に生出演し、閻魔(えんま)大王の扮装で地獄絵の魅力を語った。

放送は美術第一実習棟の鷹巣研究室から行われた。午後4時ごろ、CBCリポートドライバーの尾崎由佳さん、西尾未来子さんが中継車で到着し、アンテナを立てて機材を設置、インタビュー

の内容を確認するなど準備に追われた。鷹巣准教授も“役作り”のため(?)に自前の閻魔大王の衣装に着替え、顔にはひげをたくわえて、スタンバイ。

午後5時すぎの「街の話題」のコーナーで、スタジオで番組の進行をする久野誠さんと氏田朋子さんからの呼びかけに応じて、尾崎さんが「今日は刈谷市の愛知教育大学の美術実習棟の鷹巣研究室におじゃましています」とリポート開始。すかさず鷹巣閻魔が「地獄へようこそ!」と歓迎、“地獄絵ワールド”へ誘った。



「地獄絵はいいですよ、一枚の絵の中にいろいろ（な地獄の責め苦が）描かれている。見ていて飽きない」「地獄におちても永遠でない、終わりがあるんです。日本では地獄は極楽への通過点」「いろいろ調べると、極楽はパッとしません。地獄は思う存分、勉強できる」などと、日頃の研究の成果を約5分間にわたって名調子で語った。



また、鷹巣准教授は8月22日（日）、名古屋市中区の名古屋能楽堂で行われた「第26回衣斐正宜後援会能」で講演。

この会は宝生流の能楽師・衣斐正宜さんの定例公演で、毎回最初に文化人の講演があり、今回は鷹巣准教授が顧問を務める本学のサークル・能楽部が衣斐さんに指導を受けている縁もあり、講演が依頼された。

能の演目は「安宅（あたか）」。兄の追跡を逃れて源義経が弁慶らとともに関所越えする話で、歌舞伎では「勧進帳」

という演目になっている。そこで、講演では義経と関係する絵巻「義経地獄破り」がテーマ。鷹巣准教授は能舞台にプロジェクターで「義経地獄破り」を映し出して解説。地獄に落ちた義経が、かつての敵だった平家の武士たちと協力して閻魔王庁へ攻め入り、ついに地獄の天下をとるが...という奇想天外な地獄絵を通して、当時の日本人にとっての地獄絵の常識を紹介し、観客を地獄絵の世界に引き込んだ。

講演の後は、衣斐さんのシテで能「安宅」が演じられ、幽玄の世界が繰り広げられた。（舞台写真提供 = 工房円）



時衛国准教授に中日対照言語学賞(8/13)

本学の時衛国准教授（外国語教育）が中国語と日本語の対照言語学の優れた著書に贈られる「中日対照言語学賞著作賞」（カシオ学術賞）を8月13日（水）、受賞した。



この賞は国際的規模の学術研究会、中日対照言語学協会（会員数約450人）が、過年度に正式に出版・公表された中日対照言語学の業績を顕彰するために2009年に創設。著作賞と論文賞が設けられ、学術的に極めて難易度の高い賞とされている。

受賞の対象になったのは同准教授の著作「中国語と日本語における程度副詞の対照研究」。程度副詞は「たいへん楽しい」の「たいへん」など程度を限定する副詞。中国語と日本語の程度副詞について詳

しく分類した上で、比較考察したもの。両言語の程度副詞の修飾用法の共通点と相違点について系統的に究明。資料が正確で豊富、引用の文献が精確、表現が適切、説明も丁寧である点などが高く評価された。

8月14日（木）には受賞式が黒竜江省ハルビン市の黒竜江大学で行われ、時准教授に賞状と副賞が贈呈された。

大学スケッチ展に村瀬さんの兄隆志さん来場(8/16)

本学附属図書館での「村瀬康司さん 大学スケッチ展」（8月31日終了）会場に、作者、村瀬さんの兄で日本画家の村瀬隆志さん（75）（西尾市在住）=写真右=が8月16日（月）に来場、作品の出来を「今年3回の弟の個展の中で、ずば抜けていい」と絶賛した。

隆志さんは家業の大工道具販売や、のこぎりの目立の仕事に従事する傍ら、40年前から続けている日本画でこれまで日展に4度入賞するなど、



日本画家としても活躍している。同じ師匠について作品づくりを学んだこともあり、弟の康司さんも家業と一緒に継いで、職場でも日本画でも2人は“よき仲間”であり、“よきライバル”として切磋琢磨しあった仲。この日は、主宰する日本画教室の教え子の米津好美さん、布目守さんを伴って、スケッチ展を鑑賞した。

「絵を描くには構図が一番大切。その点で今回の作品はいい。テーマがキャンパスということで、分かりやすい。私も今日、初めて愛教大に来ましたが、絵になる風景があるんだと発見しました」と評価。さらに「あとは、描きたいところを、ほんのちょっと“濃くする”(=強調する)といいな。人間、褒めたらダメですから」とひと言。作家としての厳しい一面ものぞかせた。

家業を引退した現在、毎日5時間は絵を描いているという隆志さんだが、17歳でろく膜炎にかかり、2年間闘病生活を送った。「死ぬまでに自分なりにやれるものが欲しい」と出会ったのが日本画だった。「若いうちは、やれるだけのことをするべき。苦勞をしてもやれる間にすべきですね」と、自らの経験を重ねて学生たちへのメッセージを笑顔で語った。

中日新聞が学長にインタビュー(8/16)

国の来年度予算概算要求で国立大学の運営費交付金の大幅カットが懸念される中、取材の申し入れがあり、松田正久学長が8月16日(月)、中日新聞記者の取材に応じた。

松田学長は「シーリングから交付金を除外するようにと国会議員などへの要請を7月以来ずっとやってきた。もし10%削減されると国立の30大学分の運営費交付金、1150億円がそっくりなくなることになる。その中に愛教大も入る計算になる。単科大学は個性的な大学が多く、そういう大学がなくなることは、教育にどういう影響を及ぼすことになるのか」などと、削減が浮上してからの経緯と愛教大の取り組みを説明すると同時に、事態の深刻さを訴えた。

記者からは「これから愛知県の国立4大学が、この問題にどう対応していくのか」「政府の意図は、高等教育を私学にまかせればいいのか」「県民の理解をどう取り込むか」「文部科学省はどう考えていると思うか」などと質問が次々に投げかけられた。

この日のインタビューは1時間行われ、国立大学の現状を探るやりとりが繰り広げられた。



インターンシップ開講式(8/18)



本学のインターンシップが8月18日(水)に始まり、同日午前、第五会議室で本年度のインターンシップ生計17人が開講式に臨んだ。

富岡逸郎事務局長が登壇、前に進んだ愛知淑徳大学の竹下浩美さんがインターンシップ生を代表して「大学の組織運営の裏側や、配属先の職場がどんな方針、どんな形で業務をしているのかを学び、今後の教職に生かしていきたい」とあいさつ、式を終了した。

続いて富岡局長の講話に移り、局長は「皆さんは今日から職員と同じ条件で規則正しく過ごしていただきます。国立大学は6年前に法人化され、現在86ありますが、財政、仕事の面でも厳しくなっています。それぞれの職場では職員の指示に従い、組織の一員として仲良くやっていく感覚を身に付けるとともに大学の裏方の仕事を勉強していただきたい。8日間という短い期間ですが、成果をあげていただくよう期待しています」と述べた。



その後、山本良夫総務課長、鏡山典子人事課長が講師を務め、それぞれ本学の概要、大学事務の基礎知識について話した。また、各課長による業務の説明もあり、インターンシップ生はメモをとるなど真剣な表情で聞き入っていた。休憩を挟んで施設見学があり、学内を見て回り、午後4時前にはそれぞれの配属課に身を落ち着けた。

8月27日(金)には8日間のインターンシップを無事終了。同日午後3時から閉講式が開かれ、インターンシップ生たちは「それぞれの職場の貴重な体験を、これからの就職活動や社会に出たときに生かしていきます」と将来の活躍を誓って、本学を後にした。

附属学校研究協議会(8/18)



平成22年度全国国立大学附属学校連盟東海地区研究協議会・実践活動協議会が8月18日(水)、名古屋市千種区の「ルブラ王山」で行われた。

同会は東海地方の附属校園の教職員、PTAが一同に会して教育研究や教育実践等の目的で交流する催し。本年度は本学が主管校となり開催。開会式には松田正久学長、宮川秀俊附属学校部長をはじめ、関係者約350人が出席した。

午前10時30分、本学附属名古屋小学校の辻正人副校長が「開会の辞」として、「大学がおかれている状況は大変厳しい。特に愛教大は運営費交付金大幅削減の対応に追われ、全国の国立大が抱える課題もある。私たち教職員、PTAが削減反対に向けて具体的な活動をしていかなければ」などと述べ意欲的な取り組みを促して、開会。

続く挨拶では、同校の西宮秀紀校長が「附属校の更なる発展に向けて、諸問題を活発に話し合いましょう」、同校の横井敬PTA会長が「今、子どもたちを取り巻く環境は厳しいですが、先生方とわれわれPTAが力を合わせて、これからの学校運営の発展を信念にしていきたいと思います」と、互いの協力の必要性を確かめ合った。

来賓として挨拶した松田学長は交付金削減による影響を説明した後、「ここにお集まりの先生方、PTAの方々が広く全国に国立大学の意義を広め、憲法26条にも保障されている権利を守っていかなければならない。教員の6人に1人が国立大学卒業ですから、教員の養成は国立大学でやるんだと、広く国民の声になるように進めていかなければなりません。今日、この暑い名古屋に来てよかったと思える1日にしていきたい」と呼びかけた。

午後からは、「学校運営」「教育課程」「教育研究」など14部会に別れ、各部会で代表者による発表が行われ、現場での実践活動が話し合われた。

教員就職相談員懇談会(8/19)

教員採用試験を受ける本学学生をサポートする教員就職相談員と本学理事らとの懇談会が8月19日(木)正午から学長室で行われた。

同相談員は、本学の同窓会のメンバーで構成。青木宏氏(ひろみ)氏(昭和42年卒)=写真左から2人目=、川本健仔氏(同43年卒)=同3人目=、浅井富士雄氏(同46年卒)=同左端=で、本学卒業後に教員となり、以来教育委員会、小中学校で校長を務めるなど経験豊かな面々。昨年からは、採用試験対策の論文作成の資料を作成し、学生に採用面接について助言・指導するなどの支援をしている。



この日は、松田正久学長、岩崎公弥理事(教育担当)、村松常司理事(学生担当)、横地正喜理事(連携担当)と会食をしながら懇談した。

相談員からは、これまでの指導から「学生たちは専門科目にもっと自信を持ってほしい」「小論文作成に構成員、表現力がもっと必要」「面接練習を受けに来ない学生がいる」「同窓会と教員、学生で連携し、協力体制を強化する」などの意見が出された。約1時間ほどの懇談で、教員採用試験の現状やサポートについて有意義な話し合いが持たれた。

公開講座(8/21-24, 26, 27)



教育大学の特色を活かした本学公開講座が8月、本学などで開催された。

8月21(土), 22(日)には「援助者のためのコミュニケーション入門」が刈谷市総合文化センターで行われた。講師は佐野真紀准教授(障害児教育)。福祉や教育、医療などの対人援助の現場でコミュニケーションを円滑に図るための「コミュニケーションの意識」と、それに基づくスキルの使い方を体験的に学ぶことを目的にしたワークショップを展開した。参加者は教員、相談員など9人。まず、初めて出会った人と目で挨拶を交わしたり、言葉を掛け合ったりして自己紹介をして得られる印象の違いなどを体感し、コミュニケーションの大切さを実感。さらに、効果的なコミュニケーション、信頼関係を築く方法など援助者として必要なことを学んだ。

8月23日(月), 24日(火), 26日(木), 27日(金)には「キミ子式でキノコを作ろう!(塑像)」が、本学の美術第一実習棟で行われた。手順を考えて制作することで満足度の高い作品をつくることのできる“キミ子方式”で、紙粘土を使って、本物そっくりのキノコの塑像づくりに親子連れら8人が挑戦した。



講師の松本昭彦教授がマッシュルームやシイタケの大きさや形などを参加者に丁寧に説明し、その手順どおりに一つ一つ形作り、2日間でキノコのフォルムが完成。後半の2日間で白く乾いた粘土に水彩で彩色。茶色の濃淡で塗られた粘土は見る見るうちに、キノコに“変身”。本物と見まがうばかりの出来映えに参加者は満足そうだった。



ほかに、8月22日(日)には「地学巡検 - 流水の働き、河川地形、地層の形成 -」の講座が岐阜県七宗町で開かれた。星博幸准教授(理科教育)の指導で、地学に関心のある参加者が、大地の成り立ちや歴史を地層や地形から学んだ。

陶芸研究室学生らの作品展(8/21-29)

本学造形文化コース陶芸研究室の卒業生、在学生による展覧会「cara-mix part ~造形のチカラ」が8月21日(土)~29日(日)、三重県四日市市千代田町のギャラリー目黒陶芸館で開催された。今回が2回目で、昨年、神戸ビエンナーレ現代陶芸コンペティションで大賞を受賞した本学大学院芸術教育専攻2年の武村和紀さんと北川美鶴さんや卒業生ら12人が出展した。

武村さんの作品は幅約 18cm、高さ約 40cmの「心動」。「手びねりで、ひもを積むようにして螺旋をベースに、自分との距離感を保ち、土をいかに導いていくかを考えながら全体として流れを表現しました。大賞をいただいたことを契機に新しいことにチャレンジをしました」と武村さん。

北川さんは幅40cm、高さ26cmのものなど3点セットを出品。北川さんは「中島晴美先生に学び、心に残ったテーマは土が自分自身を写し込みやすい素材ということ。自分が作品を作る理由、





自分の存在理由を考えつつ制作しました。きれいな形ではありませんが、インパクトを感じ、共感してくれる人がいると信じています」とアピール。

12人の作品は個性的で、主催者は「公募展の受賞者や美術館の企画展に出品した人、そうした先輩の背中を見ながら日々精進している学生らは他の美術大学にひけを取らないほどの活躍をし

ています。若手の勢い、先輩・後輩が刺激し合い成長する姿を見てほしい」。

旧家である会場の古い日本家屋には座敷と蔵には合計56作品を配置。伝統建築と土から生まれた新しい造形とのコラボレーションで、訪れた人を不思議な世界に誘うのも魅力。美術館関係者などアートの専門家をはじめ、地元の親子連れなど、さまざまな見学者が展覧会を楽しんだ。



愛知県議会での要望活動(8/23)

松田正久学長は8月23日(月)、愛知県内の他の3国立大学学長らとともに愛知県議会議事堂に同県議会の日高昇議長、奥村悠二副議長を訪ね、2011年度予算における運営費交付金のシーリングからの除外、県議会での意見書議決の検討などを要望した。要望活動に参加したのは濱口道成名古屋大学総長、木下隆利名古屋工業大学理事・副学長、稲垣康善豊橋技術科学大学理事・副学長、松田学長。



濱口総長は概算要求一律一割削減が実施され、運営費交付金が大幅減額になった場合、国立大学の教育研究が立ち行かなくなる恐れがあることを説明、理解を求めた。日高議長は「日本は資源のない国。学問を通して人材で生きていくしかない。これまでの毎年1%削減の影響もあるでしょうし、これ以上、予算を削減させてはいけない」と理解を示した。

また、松田学長が「未来にどのような子どもを育てていくかは20年、30年後にならないとわからない。ご支援をいただきたい」と述べ、木下理事、稲垣理事

が教員を減らすなどしている大学運営の厳しさを訴えると、日高議長は「自分のことしか考えない人が多い。将来の人づくりや100年先を考えるのが政治の責任」と答えた。奥村副議長は「学生のレベルが低下しているといわれる」と原因、対応について質問。大学教育の在り方を巡る意見交換も行われた。最後に日高議長は「微力ですが、皆さんの意向に添えるよう頑張りたい」と各会派への働き掛けなどに意欲を示した。

この後、名古屋大学を除く3大学の学長、理事は自民党県議団の久保田浩文団長、田辺克宏幹事長、塚本久民主党県議団長、鬼頭英一公明党県本部幹事長(県議)と面談し、各大学の厳しい現状を報告するとともに、運営費交付金を削減しないよう支援を求めた。各団長とも理解を示し、議長や会派間で意見交換して対応を検討することを約束した。

中国留学の高橋利幸さん挨拶(8/23)

9月から1年間中国に留学する本学現代学芸課程国際文化コース2年の高橋利幸さんが8月23日(月)に学長室を訪れ、松田正久学長、村松常司理事(学生担当)に出発の挨拶をした。

高橋さんは派遣留学生として、中国における本学の協定校、東北師範大学に留学する。同校への留学は高橋さんが第1号で、「セントレアのホテルでアルバイトをされていて中国人の観光客と接する機会が多く、話をしているうちに面白いなと思ったのが中国への留学の動機。頑張っ

松田学長は「本当に中国の人と友達になりたいければ、中国語を話せるようになりなさい」と助言。また、留学先が旧満州で反日感情も依然、根強く残っている土地とあって、「必ずしも日本にいい印象を持っていないかもしれないが、日本の歴史を踏まえて行動をするように。きちんと考えて、噛み砕いて自分のものにして話をするように。もっと古くは中国の文化を学んだのだから。健康に気をつけて、頑張ってください」と激励した。

松田学長は昨年、同校を訪問した際の学校の様子や日本人留学生と会った際の話もして、現地の見所や生活などもアドバイス。そして、留学中の生活ぶりなどを伝えるレポートを2カ月に一度は送るようにと依頼した。

高橋さんは8月27日に日本を出発し、新学期が始まる9月1日から同校で中国語などを学ぶ。留学中は大学の寮で生活する。留学レポートは今後、AUE Monthlyで掲載の予定。



タイ協定校の研修生が来学(8/24-26)



タイにおける本学の学术交流協定締結校、ラチャパット・ラチャナカリン大学から、アリーヤー・ラオマホンさん=写真右から2人目=が、国際交流基金が実施する大学生訪日研修の一環で8月24日(火)、来学した。同研修は日本語を学ぶのと同時に日本の文化・社会を理解する機会を提供することを目的としたもの。アリーヤーさんは、14カ国39人の学生と共に7月28日(水)から約6週間の日程で日本に滞在し、国際交流基金関西国際センターでの日本語・日本文化についての講義の他、ホームビジットや今回の連携大学訪問などで多様な面から日本への理解を深めている。

25日(水)には、本学に留学中の同校からのタイ人留学生とともに、松田正久学長と村松常司理事(学生担当、国際交流センター長)を表敬訪問。大学では日本語を専攻しているアリーヤーさんが、「卒業後はタイで日本語教師になりたいです」と希望を語ると、学長は「是非、タイで多くの人々に日本語や日本文化を広めていただきたい」と激励した。本学滞在中は、図書館や講義棟、国際交流会館などの学内施設を見学し、本学学生とも懇談する機会を持ち、日タイの交流を深めた。また、日本文化体験として、ハイウェイオアシスにある天然温泉かきつばたを訪問。タイには温泉が殆どないため、以前から温泉に入ってみたかったというアリーヤーさんは、初の温泉に大満足した様子だった。

26日までの3日間の本学研修を終え名古屋を後にしたアリーヤーさんは、9月8日(水)までの日本滞在中京都・奈良への研修旅行などを通じ、より多彩な日本文化を学ぶ。

お知らせ・投稿・報告

目からウロコのアート展(9/10-20)

刈谷市政60周年を記念した「現代アート 目からウロコのアート展」が9月10日(金)~20日(月)に刈谷市駅前商店街「スペースAquaふれあい交流広場」で開催。

同商店街が主催し、本学が共催のコラボ企画。出展は加藤マンヤ氏と本学美術科2年生。「こんなアートあり?」と思わせるユニークな作品が並ぶ。時間は午前10時~午後5時、水曜日休館。入場無料。問い合わせは 0566-23-2488

井戸准教授からのフィンランド便り (投稿) = 最終回 =

8月になると早くもヘルシンキはすっかり秋の様子を呈し、あれだけ暑い暑いと言っていた人々も口を閉じ、気温も一気に10度位まで下がるようになりました。いかにフィンランドの夏が



短いかということをも身を持って体験した訳で、またフィンランド人がその一瞬の夏を嬉々として、浴びるように楽しむ感覚が少し分かったような気がします。先日はラップランド近くのPosioという小さな街を訪れましたが、既に夜は氷点下2度しかなく、日本の真冬より寒かったかも知れません。PosioにはPentikというフィンランドで2番目に大きな陶磁器メーカーがあり、(1番はアラビア製陶)また世界最北の窯としても知られています。輸出を一切していないため日本では知名度がないのですが、フィンランドでは大変人気があり、急成長をしている企業でもあります。

そのPentikでこの度ワークショップとレクチャーが開催され、私も教授と一緒に参加して来ました。実はPentikを知ったのは私もフィンランドに来てからで、その商品の幅の広さには驚いていたものの、余り興味は抱いていませんでした。ところが実際に工場を拝見し、生き活きと働いている人々の姿を見ることで、いかに彼らがプライドを持って仕事をしているかを知り、普段から関わりの深いアラビア製陶とはまた違う魅力を感じることが出来ました。社長曰く日本にも大変興味を抱いているとのこと、今後も注目していきたいと思っています。

さて、そんなせわしい日々を過ごしている間に、気付けばもう8月も終わりが近づき、いよいよ帰国もカウントダウンとなりました。ここへ来るまでは緊張の毎日で体調を崩す程でしたが、いざ来るとフィンランドの優しい人々に支えられ、本当に素晴らしい毎日を過ごし、あっという間の1年でした。アパートの庭にはナナカマドの木があり、去年の今頃赤い実を付けていたナナカマドを眺めては異国を感じていたことを思い出します。そして最近そのナナカマドに再び赤い実がなり、1年が経ったのだなということを実感すると共に、帰国しないといけない時が告げられているようでとても寂しい気持ちになります。振り返れば苦しいことも勿論ありましたが、そのことも含めて全てが素晴らしい経験でした。きっとまた戻って来るとも思います。その時はフィンランドの皆様、宜しくお願い致します。そして愛教大の皆様、後期から改めて宜しくお願い致します。素晴らしい機会を与えて下さった全ての方々にこの場を借りて御礼申し上げます。ありがとうございました。(井戸 真伸)



編集後記

『月刊 生涯学習』6月号で女性書家・紫舟さんのインタビュー記事があり、それを読んだ後に、抽選で彼女の直筆色紙をプレゼントとあったので応募しました。なんと、それが当たって、8月31日に届きました。サインペンの直筆で「龍馬伝」と。これは、後半、本学にとっても良いことのある兆しかもしれません。(〇)

オープンキャンパスの終了後は夏休みに入り、学内はガランとして静か。そんな中、猛暑に負けずにクラブやサークル活動に汗を流す学生たちや、図書館で勉強する学生たち、リクルートスーツで就職活動する学生たちに出会うとホッとします。と同時に、「がんばってるな!」とこちらから密かにパワーをもらっています。学生時代の夏休みは、社会に出てからはなかなか得られない、まとまった自由時間です。記録的な暑さで体には過酷だけれど、どうか有効に使ってください。夏休みも後半、皆さんが元気にキャンパスに戻ってくるのが待ち遠しいこの頃です。(K)

投稿のお願い

学内外の出来事(教育・研究・地域連携・国際交流・学内事業など)に関するニュースの提供をお待ちしております。

メール:kouhou@m.auecc.aichi-edu.ac.jp 編集責任者:総務担当理事 折出 健二